

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



佐分眞(さぶりまこと)
明治三一年昭和二(一八九一—一九三六)
年《雪のグリンドルワルト》
昭和二(一九二七)年
キャンヴァス、油彩
三七・五×四五・二cm

本作は、渡仏中の昭和二(一九二七)年に三人の仲間とともに訪れた「グリンドルワルト」(現在一般に「グリンドルヴァルト」と呼ばれる)をモチーフとした作品である。この地は現在、スイス山岳観光の一拠点となっている。キュビズム的な建物の処理と後の重厚な色彩感覚を予感させるモノクロームに近い色使いが印象的である。なお、作品の裏面には、「佐分眞遺作展 昭和十一年九月廿三日 西村義一氏 佐分氏ハ〇年春愛死ス 瑞西グリンドルワルドスケッチ 余モ昭和三年春同地ニ遊ブ」と記されている。

佐分は、名古屋市の生まれ。大正一一年、東京美術学校西洋画科を卒業し、昭和二年から昭和七年にかけて渡仏。昭和五年に一時帰国、この時に《貧しきキャフェの一隅》を持ち帰り、翌年の第十二回帝展に出品、特選を受けた。

(上席学芸員 泰井良)

No.
124
2016年度 | 冬 |

「徳川の平和」展への感謝と反省

館長 芳賀 徹

本館創立三十周年と徳川家康歿後四百年とを記念して催した「徳川の平和パクス・トクガワナ」展が無事終了して、企画者としてほっとしている。

二〇一六年九月十七日（土）から十一月三日（木）まで、一カ月半の会期中に二万七千人ほどの来館者があったという。ひそかに期待していた三万人に及ばなかったのはちょっと残念だが、期間中毎週週末に催した「徳川の平和」論の講演、鼎談、対談計九回というかなり重厚な企てにも、毎回講堂一杯の聴講者がいらっして賑わった。まことにうれしいことだった。静岡県内外からの来館者の「徳川文明」に対する関心の高さ、そして中高年市民の勉強好きの姿勢がよく伝わってきたのである。講演者の方々も好機到来とばかりに、それぞれの専門の分野から、何枚もの資料やパワーポイントをととのえてきたりして、自説展開、壇上壇下とも大いに愉しんだ。

静岡新聞はじめ毎日新聞（高階秀爾

氏）、日本経済新聞（宮川匡司氏）他、

マスコミもわれらが本意をよく理解して報道し批評してくれた。また、館長としては三年ほど前からの静岡県商工会議所（会頭・はごろもフーズ会長後藤康雄氏）と徳川宗家十八代御当主徳川恒孝氏を中核とする「徳川みらい学会」の、物心両面にわたる御支援と激励にも、ここで熱い感謝の念を捧げずにはいられない。そして当然、いままも東西比較文明史の学者でありつづける県知事川勝平太氏の、あのにこやかな知的抱擁力に対しても。

館内では学芸課の新人野田麻美さんが、この展覧会の主担当となって東奔西走、作品の借入と返却に当り、全二百三十頁の部厚い図録の執筆と編集をほとんど一人で引き受けた。その過程で一つ問題が生じた。それは狩野派研究が専門のこの才媛が、本展を「江戸絵画」の名品による「美の祭典」と呼んで美術史中心で通そうとするのに対し、館長たる私はこれをもっと広げて

美術作品を視覚資料として徳川日本の「平和」の構築と維持と享受の実態を語るむしろ文明史の展覧会としたかった点である。この基本構想上の対立は何回かの企画委員会の折に老若の言い争いにまでなったのだ。野田学芸員は頬を染め口をとがらせたことまである。するとそこに口をはさんで両人の間を調停し、いつのまにかうまく本筋をまとめてくれたのが学芸部長の泉万里さんであった。この経緯はいまになってみると、なかなか愉快で、老館長のいい思い出もある。展覧会初日に二階展示室の入口に立って、京都二条城障壁画のあの狩野探幽（または山楽）の《松図》の威容を目のあたりにしたときは、やっぱり野田さんにやられたか、と思ったほどであった。

この大規模展で、いまだに少々残念に思っているのは、その結末である。会場の最後の展示作品が徳川第十五代将軍慶喜による油彩の小品（31×45cm）《風景》で、これで会場がぶつとりと

細々と閉じられてしまった点である。あまりにあっけない。館長としてはここに最後に「徳川の平和」の統括ないしは凱旋門、そしてそれを継承した明治日本の新出発を示す巨大作品として、明治神宮外苑聖徳記念絵画館所蔵の山口蓬春作《岩倉大使欧米派遣》（3×2.7m、一九三四年）を一点、ぜひ飾りたかった。徳川日本の二百年におよぶ西洋研究の蓄積と旧武士知識人のエリートたちがこの使節団に集結され、彼らによってこそ空前絶後の近代西洋文明の新研究が達成されたからである。山口蓬春のこの美しい大作ならば、十分にあの《松図》に対峙しえたであろう。しかしこの絵の話はまた別な折にとっておこう。



渡辺崋山《一掃百態図》より「席面会」 田原市博物館蔵

「東西の絶景」展と「徳川の平和」展

ふたつの三十周年記念展を振り返って

当館研究活動評価委員 豊橋市美術館アドバイザー

金原 宏行

ふたつの三十周年記念展が多くを観客も動員し、ともに成功裏に終わったことは喜ばしい。

開館三十周年記念展「東西の絶景」は、長年かけて築き上げてきた県立美術館のコレクションが質量ともに充実してきたことを知らしめ、十七世紀以降の東西の山水・風景画が新しい観点から鑑賞できる五つの章立てが新鮮であった。

会場では第二章の「日本人の油彩画」が興味深く、性急に近代化が計られた日本洋画の受容と独自の展開のなかでは、生前報いられなかった画家たちの作品が目立った。佐伯祐三の《ラ・クロッシュ》(写真1)はその一つで、最初の渡仏で自作をヴラマンクに「このアカデミック」と指弾されたものの、再渡仏し、彼の「純粹さ」、混じりけのない個性が、時を超えて人々を感動に誘う。自己の内面と表現方法とを直結した画面には激しい葛藤が見え、「模倣なく、アカデミズムなく、けれども



写真1 佐伯祐三《ラ・クロッシュ》(当館蔵)

なく、まやかしがない」(山本發次郎のことば) 佐伯が病身で描いた二十九才の作品である。

紆余曲折の多い日本の油絵は、歴史の試練に耐えうるものが少ない。その移植過程から何かが抜け落ちてしまつたと考えさせられた。西洋の影響が大きく、上すべりする仕事が多く、まさに「近代日本洋画史は慟哭の歴史」(匠秀夫のことば)であったと思う。

「徳川の平和」展(バクス・トクガワーナ)は、狩野派に始まり、最後の將軍徳川慶喜の小さな風景で終わる。

二百五十年の間に花咲いた代表作から天下泰平を享受した人々の息づかい、狂騒と静寂があり変化に富む。このように祝祭的要素が盛り込まれた作品群には歴史的主题や文学性など奥行や広がりもある。だから絵を見ることは、自らの想像の翼を抜けることにもなる。

劈頭の狩野探幽作《松に孔雀図壁貼付》(重要文化財)に豪華絢爛たる力強さを見て、江戸中期の与謝蕪村《若竹図》(写真2)では竹林に「若竹や

はしもの遊女 ありやなし」(安永5年)の書を添え、詩書画一体の「俳諧ものの草画」が淡彩ながら艶やかだ。司馬江漢は、プリミティブな洋風画《異国風景人物図》などの他、銅版画の《獅子のいる風景図》があり、自作の《広尾親父茶屋図》をもとにヨンストン『動物図譜』の「獅子図」を組み合わせて、試行錯誤しながら日本の風景を描くために模索している。

幕末の谷文晁、渡辺崋山や椿椿山など、この地域で人気の高い南画(文人画)は、作品をして自らの文人精神が盛り込まれ、伝来した南宗画に負けな

いものとなつていよう。
通観してみると、御用絵師の典雅な作品、風俗画、诗情あふれる南画、進取の気に富んだ洋風画家の作品、都市図や植物図譜、稿本(下図)など幅広い作品には見る楽しさにあふれており、県民の渴望を癒した。これらの記念展は、後々まで深い印象を残すものとして広く記憶されるであろう。



写真2 与謝蕪村《若竹図》
愛知県美術館 木村定三コレクション

「蜷川実花展」

平成29年2月1日(水)～3月26日(日)

な領域に切り込む、
蜷川実花の写真表現
の現在をご紹介します。

蜷川は、多摩美術
大学美術学部クラフ
ティックデザイン学科
在籍中の一九九六年
に、若手写真家の登
竜門といわれるリク

ルート社主催の第七回「ひとつぼ展」
でグランプリを受賞、同年、キヤノン
が主催する第九回「写真新世紀」で優

秀賞を同時受賞し、写真界でその名を
広く知られる様になりました。一九九

〇年代半ば「女の子写真」あるいは「ガ
ーリー・フォト」とも呼ばれ、若い女

性達が小型化したカメラを手に、「半
径5メートル以内」の日常を捉えた写

真や、セルフポートレイトやセルフヌ
ードをテーマにした写真を撮る行為が

ムーブメントとなり、一部の若手女性
写真家がマスメディアで頻繁に取り上

げられる、一種の社会現象がおこりま
した。(飯沢耕太郎『女の子写真』の

時代』、二〇一〇年、NTT出版)。蜷
川は、その動向の中心に身を置き、二

〇〇一年に、写真界の芥川賞と呼ばれ



All images ©mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery

る第二十六回「木村伊兵衛写真賞」を、
HIROMIXや長島有里枝とともに受賞
し、写真家としての評価を確たるもの
としました。

「女の子写真」ブームを通過してか
らの蜷川は、表現の個性を際立たせな

がら現代アートやファッションへと活
動領域を広げていきました。二〇〇四

年より、村上隆や奈良美智が当時所属
する小山登美夫ギャラリーで個展を開

催、二〇〇六年には、VOCA展で大
原美術館賞を受賞し、「蜷川カラー」

とも呼ばれる極彩色の鮮烈な写真イメ
ージは、現代アートとしても高い評価

を受けています。

本展では、この蜷川実花の代名詞と
も言える極彩色の花の写真はもとよ
り、背景のセットや衣装、小道具にい

たるまで、蜷川がディレクションし撮

影した著名人らのポートレイト、ある

いはトランスジェンダーやコスプレイ

ヤー、ヴィジュアル系バンドなど、東

京のアンダーグラウンドシーンをまと

めた「TOKYO INNOCENCE」シリ

ーズなどを紹介します。加えて、華

やかな色彩の蜷川作品に潜む闇を表現

した「noir」、二〇一一年三月の東日

本大震災を受けて、震災直後に、生を

謳歌するかのように咲き誇る桜を蜷川

が憑かれたように撮影した「桜」、花

火や野外フェスの視覚的鮮やかさと、

利那的な美を留めた最新作「Light of」

まで八シリーズ、約四八〇点をご紹介

し、現在の蜷川実花の全体像をご覧

いただきます。

(上席学芸員 川谷承子)

現代日本を代表する写真家で、映画、
ミュージックビデオをはじめとする映
像表現のほか、近年はファッションブ
ランドとのコラボレーションや新幹線
の外装を手がけるプロジェクトに参加
するなど、ますますその活動の幅を広
げる蜷川実花は、若い女性を中心に幅
広い年代層より、日本国内外で熱い支
持を受けています。二〇一四年には、
芸術文化における幅広い見識から二〇

二〇年東京オリンピック・パラリンピ
ック競技大会組織委員会理事に就任
し、芸術文化の最前線でその感性が求
められています。この展覧会では、二
〇一五年に活動二十周年を迎え、新た

な領域に切り込む、
蜷川実花の写真表現
の現在をご紹介します。

な領域に切り込む、
蜷川実花の写真表現
の現在をご紹介します。

山の風景

富士山、箱根からスイスの山まで

平成29年2月1日(水)～4月2日(日)

日本は山と海に囲まれた独特の地形をしています。皆さんも、身近にある山々に登られた経験が一度はあると思います。しかし、この登山が本格的に行われるようになったのは、明治以降、つまり近代になってからのことです。今回の展示では、山をモチーフとした近代洋画の作品を紹介します。山といえば、日本人なら誰もが知っている「富士山」。古来、多くの絵師・画家たちが「富士山」をモチーフとした作品を制作してきました。また明治になると、外国人もその魅力に魅せ



図1 チャールズ・ワグマン《富士遠望図》1876年以降 キャンヴァス、油彩

られ、雄姿を描きました。チャールズ・ワグマン《富士遠望図》(図1)は、湾曲する海岸線から江ノ島越しに富士山を遠望した作品で、和服姿の人たちが点景として配されており、当時の風俗が偲ばれます。こうした外国人に強い刺激を受け、多くの日本人画家たちが富士山や「山の風景」を描きました。箱根や浅間山、天の香具山、毛無連峯など、画家たちの独自の作風をご覧ください。



図2 児島善三郎《箱根》昭和12年頃 キャンヴァス、油彩

児島善三郎《箱根》(図2)は、晩秋から初冬にかけての箱根峠より望む芦ノ湖の景色を描いたものです。画家自身が「晴れて見たら、それ程でもなかったが、やはり大きな山のように感じられたので、相当誇張して描いた」と語っているように、箱根の山は、一際躍動感に溢れています。また樹木などの細部は大胆に省略され、統一的なリズムと装飾性を帯びています。青木達弥《薄》は、前景に群生する薄を油彩特有の重ね塗りしたマティエール(絵肌)で描き、遠景にはやや平面的に描かれた浅間山がそびえています。また石川欽一郎《神域より天の香具山を望む》は、前景に黄色い広々と

した湿地帯が広がり、朦朧とした空気のなかに天の香具山が佇んでいます。古来、山の持つ神性を石川が台湾で深化させた水彩で描き出しました。

曾宮一念《毛無連峯》は、静岡県と山梨県の県境に位置する天子山地の最高峰・毛無山をモチーフとして描かれています。曾宮は、自ら絶筆とするこの作品を描いた後、同じモチーフの《失題 毛無山》を描いています。失明後は、

これまでの「記憶」を頼りに描かれたと考えられ、曾宮の絵画制作に対する強い信念が窺えます。アトリエから見えるこの山を好んで描いており、毛無山は、曾宮のライフワークといえるでしょう。

このように、画家たちは、現地に足を運び、またある者は実際にその山に登り、山を制覇しようとしてきました。現場でしか得られないリアルな体験をもとに、「山の風景」を描いたため、「山の風景」は、画家たちの独自の作風や表現に満ち溢れています。今回の展示では、こうした「山の風景」の魅力の一端にふれていただきたいと思います。

(上席学芸員 秦井良)

平井 顕齋 《耕織図》

主任学芸員 浦澤倫太郎



図① 平井顕齋《耕織図》
左幅《織機図》151.9×74.0



右幅《耕作図》151.3×74.2

江戸時代後期の遠州（現在の静岡県大井川以西）では、江戸の谷文晁や渡辺崋山らの影響の下、南画が盛んに描かれ、これらに親しむ風土が育まれていた。この遠州南画壇の中でも、特に重要な画家として磐田郡見附宿現在の磐田市見付出身の福田半香（文化元（一八〇四）年—元治元（一八六四）年）や榛原郡青池村（現在の牧之原市の一部）出身の平井顕齋（享和二（一八〇二）年—安政三（一八五六）年）らが挙げられる。

このたび、個人の方より平井顕齋の作品五件を当館に寄贈していただくこととなった。これらが静岡にゆかりある作品の収集・展示を継続している当館のコレクションに加わったこと、そして県民の新たな財産となったことは大変喜ばしい。本稿ではこれらのうち、顕齋の代表作の一つと目される《耕織図》二幅対（図①）を紹介したい。

最初に平井顕齋の生涯について振り返ってみよう。顕齋は享和二（一八〇二）年、榛原郡青池村谷之口の豪農の家に生まれた。幼名は元治郎、名は忱、字は欽夫と言い、号には顕齋、三谷を用いた。幼いころより画才を発揮し、十二歳にして、掛川藩の御用絵師・村松以弘に入門。江戸には三度出ており、谷文晁と渡辺崋山に師事している。崋山没後は郷里を中心に活躍した。

顕齋の作品は、その題材において多様性に富み、師の崋山もその画域の広さを評価している。山水画を中心に、花鳥画、故事人物画、仏画も手がけ、また数は少ないものの楠正成や日本武尊などを題材とした大和絵系の作品も残している。

これらは地元・牧之原市を中心に伝えられ、近代以降も収集・愛好の対象となり、当館を含む県内の美術館・博物館でも紹介されてきた。

当館には現在、最晩年の制作になる《山水図》をはじめ四件の作品が収蔵されている。

さて、顕齋の画業において特筆すべき点の一つに、師・崋山に倣った作品を多数手がけていることが挙げられる。崋山門下の画家たちは、しばしば師の作品を模写したが、顕齋の場合、その数が群を抜いている。これらは崋山が没した天保十二（一八四一）年以降の年紀を持つものが多い。模写の対象となった作品は《千山万水図》（田原市博物館蔵）をはじめとした崋山の代表作から、『ヒボクラテス像』（九州国立博物館蔵）などよく知られたもの、更に《鍾馗嫁妹図》や《林和靖図》など、原本の行方が現在では知られない作品まで多岐にわたり、師風を熱心に学び取ろうとした顕齋の姿勢がうかがわれる。これら崋山画に倣った作品は、顕齋の画業や遠州地域における南画の展開を考える上で重要である。

本稿にて取り上げる《耕織図》二幅対も崋山画をもとに制作された作品の一つである。右幅《耕作図》、左幅《織機図》からなり、水稻耕作と養蚕・織織をセットで表す、南宋以来描かれてきた画題である。左右幅いずれも広々とした農村を舞台に、《耕作図》では初夏の田植え、《織機図》では秋夜の織織りを中心とした人々の営みを、俯瞰視点を取り、精緻な筆遣いと落ち着いた彩色で描写する。左幅左上の落款から、弘化二（一八四五）年、崋山没後の制作になることが判明する。

このうち、左幅《織機図》は、渡辺崋山《月下鳴機図》一幅（天保十一（一八四一）年、図②）とよく似た構図であり、顕齋がこ

れを手本としたことが明らかである。一方で、右幅《耕作図》については、その直接の手本となった崋山作品は今のところ確認できない。

昭和十六年に刊行された崋山の作品集『錦心図譜』には、現在一幅として伝えられている《月下鳴機図》の対として《耕作図》（図③）が掲載されており、もともと耕織図二幅対として伝えられたことがわかる。しかし崋山《耕作図》と顕齋《耕作図》とは全く異なった図様であり、構図やモチーフの対応関係は認められない。顕齋《耕作図》が、崋山画の手本を丸ごと写したのではなく、複数の先行作品を参照して制作された可能性については、すでに指摘されるところであるが（参考文献五）、本稿では改めてこの問題に注目し、《耕作図》中の各図様の引用元を明らかにするとともに、顕齋画の特質について考えてみたい。

まず、顕齋《織機図》と崋山《月下鳴機図》を比較する。両者は一見すると確かによく似ているが、顕齋《織機図》は、《月下鳴機図》の構図・モチーフを踏襲しながらも、いく



図② 渡辺崋山《月下鳴機図》 静嘉堂文庫美術館蔵 静嘉堂文庫美術館イメージ・カイブ/DNPartcom



図③ 渡辺崋山《耕作図》（『錦心図譜』より転載）



図④ 左：渡辺崋山《夏耕樹雨図》(部分)・錦心図譜より転載 右：平井顕斎《耕織図》右幅《耕作図》(部分)

つかの改変を加えている。《織機図》前景から見ていくと、《月下鳴機図》の画面を拡張するかのように、家屋の左側に岩や門など、新たなモチーフを付け加えている。中景では池を奥行き方向に引き伸ばし、対岸の風景はより遠くなっている。これに伴い、《月下鳴機図》では背の高い樹木の背後にあった帯状の白雲は、画面上方へと移動し、中景と遠景を明瞭に分節するように位置する。遠景の山岳は一回り拡大し、これにより山際に浮かぶ月も、より左方へと移動している。このようなモチーフの付加・改変の結果、崋山《月下鳴機図》に比して、顕斎《織機図》はより奥行き感が強調された構図となっている。本図において顕斎は師の作品を範としているが、このようにアレンジを加えている点は注目される。他の崋山画に倣った作品にも手本からの改変が見られる場合があり、顕斎が師風の発展を模索していたことがうかがわれる。



図⑤ 左：『佩文齋耕織図』第十圖「挿秧」 右：平井顕斎《耕織図》右幅《耕作図》(部分)

次に右幅《耕作図》を見てみよう。直接手本となった崋山画が確認できない本図については、現段階では制作方法について最終的な結論を出すことは難しいが、ここでは顕斎が先行作例を参照しつつも、《織機図》以上に創意を發揮し、構図を組み立てた可能性を提示しておく。それは崋山画だけ

けでなく、崋山画以外の図様の部分的引用も確認されるためである。たとえば《耕作図》前景の人物と牛の一群が、崋山が描いたとされる《夏耕樹雨図》と称する作品にも見られる(図④)。ちなみにこれは後年の顕斎《山水図襖》(個人蔵、弘化四「一八四七」年)という大画面作品にも登場しており、顕斎によって粉本として活用されたことが知られる。

また中景に描かれる田植えをする男たちは、清代に出版された『佩文齋耕織図』第十圖「挿秧」(図⑤)、あぜ道を行く母子は同じく『佩文齋耕織図』第十二圖「耘」に描かれる図に類似する。『佩文齋耕織図』は康熙帝が宮廷画家焦秉貞に命じ、耕作・織機それぞれ二十三図、計四十六図を描かせ、御製の七言詩を各図に加えて二六八九(康熙二十八年)年に刊行したもので、朝鮮や日本にも伝えられ、与謝蕪村や呉春も粉本として利用した。そもそも崋山《月下鳴機図》においても、家屋や人物などが、その中の複数の図から取られていることが指摘されている(参考古献三)。顕斎も広く流布したこの版本から部分的に図様を引用したことが想定される。

しかし顕斎《耕作図》における部分的引用は、先行作品から群像をほぼそのまま抜き出して画面各所に配置するのに対し、崋山《月下鳴機図》では、『佩文齋耕織図』中の一図から抜き出した家屋の中に、別図から人物像を挿入するなど、より複雑な操作が行われているという相違が認められる。これは、師弟による図取りの手法の違いとも捉えられるかもしれない。以上のことから、顕斎《耕作図》は、何らかの崋山画に直接依拠したのではなく、先行作品から各モチーフを引用し、それらを組み合わせ、全体の構図を組み立てたという仮説を改めて提示したい。画面の構成法に相違が生じた要因は定かではないが、何らかの事情で崋山の耕織二幅対のうち、顕斎が実見できたのは《月下鳴機図》だけだったということも考えられよう。それ故に手本を参照できなかった《耕作図》に一層の創意を發揮する余地が生まれたのではないだろうか。

これまで見てきたように、左幅《織機図》は顕斎が師風を忠実に継承するだけでなく、創意を加えようとしていたことを物語っており、右幅《耕作図》にも、確証を得られない部分があるが、更なる試行錯誤の可能性をうかがうことできる。本作は顕斎の画風展開を考える上で重要な示唆を与えてくれる貴重な存在である。

参考文献

- 一 『渡邊崋山先生錦心図譜』東京美術青年会 昭和十六年
- 二 『崋山の弟子 半香・顕斎・茜山』常葉美術館 昭和十五年
- 三 上野憲示「渡邊崋山の芸術―田原塾居中の作品を中心として―」『古美術』七十号 昭和五十九年
- 四 『平井顕斎展』静岡県立美術館 平成三年
- 五 飯田真「山本琴谷と無逸図」『静岡県立美術館 紀要』第十号 平成四年
- 六 冷泉為人／河野通明／岩崎竹彦／並木誠士「瑞穂の国・日本―四季耕作図の世界―」平成九年



本の窓

ロバート・M・エドゼル著
高儀 進訳
『ミケランジェロプロジェクト』
角川文庫(エ161、2) 二〇一五年
(初版白水社二〇一〇年上下二巻)

第二次大戦中のヨーロッパ戦線、戦いの中で次々に破壊される美術品や建造物、古文書等の運命を憂い、これを何とか残そうとする人々がいました。彼らは軍に働きかけ、その一員として最前線に赴き、重要な史跡を砲撃から救い、ナチスによって収奪された美術品を奪回していったのです。私達がミケランジェロの《プリュージュの聖母》やヤン・ファン・アイクの《ゲントの祭壇画》を鑑賞出来るのは、彼らがいいたからなのです。今日、国際紛争時の文化財保護について、指標作りが進められてはいますが、敵の大事にしているものを狙って壊そうとする動きは、激しさを増しています。だからこそ、過去にあったこういう活動を、心に留めておきたいものです。

(当館上席学芸員 新田建史)

美術館友の会も30周年を迎えました

県立美術館友の会会長 北條 博厚

美術館開設と同時に発足した友の会も、今年で三十周年を迎えました。風光明媚、気候温暖な静岡県ではありますが、文化芸術の香りには乏しい憾みがありました。県立の美術館を持つことは、県民全体の願いであり、喜びでもありました。開館の年には物珍しさも手伝ってか、会員数も二千人近くになりましたが、会員の高齢化が進み、遠方の人は足遠くなるなどで、現在は約五百人に減少しています。しかし、本当に美術が好きで熱心な会員が残っているという印象です。

年会費を払って友の会の会員になると、常設展はもとより、企画展の観覧が無料になります。特別会員になると、企画展の開会式に招待され、高価な図録が無料で貰えるという特典があります。

しかし、友の会の目的は会員の便宜を図ることばかりではありません。年三回の会報の発行を始め、国内外の美術館巡り、実技講座、ギャラリートーク、会員の作品展などを企画して美術に触れる機会を増やし、会員同士の親睦を深め、美術館が県民により親しまれることを願って活動を行っています。中でも国内外の美術館巡りは人気が高く、当館の学芸員が同行をして下さり好評を博しております。

県立美術館ができたお陰で、地方に居て

も優れた美術作品に触れる機会が増えたことは喜ばしいことですが、地方の美術館の役割としては、地域に関連する芸術家の育成や支援をすることも大事です。若手芸術家の作品購入や、寄贈、寄託作品の受け入れなどにはこれまで以上に力を注いで欲しいと思います。また、東静岡、草薙周辺地区には美術館に隣接して大学や図書館、舞台芸術劇場などがあり、文教地区としての意義が大きい地域です。お互いが連携し合っ、静岡の文化芸術の発信地として更なる充実、発展することを願っています。



友の会30周年記念旅行 海を渡って四国そして神戸 イサム・ノグチ庭園美術館前にて

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

30th ANNIVERSARY

つながる、次へ

教育普及「体感空間」イベント・スケジュール

わくわくアトリエ「一眼レフでパチリ！」

※事前申込制 対象：小学生以上

2月5日(日)

一眼レフカメラの使い方を習って撮影します。
カメラは当館で用意します。

実技講座「写真—デジネガ&フォトグラム」

※事前申込制 対象：中学生以上

2月11日(土)・2月12日(日)

デジタル画像をアナログにプリントする「デジネガ」と、直接感光紙に物体の形を焼き付ける「フォトグラム」を体験。

ちょこっと体験(シルクスクリーン)

3月1日(水)～3月5日(日)

10:00～12:00 / 13:00～15:30

シルクスクリーンの技法を使って短時間の印刷体験。
作った作品はおみやげに。

ロダン館デッサン会 ※事前申込制 対象：中学生以上

2月3日(金)・4日(土) 3月10日(金)・11日(土)

ロダン館で本物の作品をじっくりとデッサンできます。

ねんど開放日 対象：3歳以上(保護者と参加)

1月8日(日)・2月19日(日)・3月12日(日)

たくさんの粘土で自由に作れる親子参加のイベントです。

参加費や時間、申込方法等の詳細は当館ホームページの「教育普及・講座」>「実技室プログラム」でご確認ください。

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。